

お茶の水女子大学附属高等学校

女性の力をもっと世界に ～目指せ未来のグローバル・リーダー～

【構想の概要】

全校生徒を対象に、確かな基礎学力と幅広い教養を身に付け、グローバルな社会の諸課題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と協働して、それらを解決する能力を持つ生徒を育成するため、探究的な学習に取り組む「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ」、「持続可能な社会の探究Ⅱ」を柱とする教育課程の研究開発を行う。



教育課程表 (平成28～30年度入学生) はSGHカリキュラムの中心

教科	科目	1年		2年		3年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	5					
	現代文B			2		2	
	古典			3			
	国語表現						2
	古典A						2
	古典B						1
	教養基礎「国語」I	1					
歴史	日本史A			2			
	日本史B					4	
	世界史A			2			
	世界史B					4	
	地理					4	
	グローバル地理	2				3	
	地理演習					1	
公民	政治・経済	2				2	
	公民演習						2
数学	数学I	3					
	数学II			3			
	数学III					6	
	数学A	2				2	
	数学B			2		2	
	教養基礎「数学」I	1					
理科	教養基礎「数学」II			1			
	教養基礎「数学」III					2	
	物理学基礎			2		1	
	物理学基礎					5	
外国語	コミュニケーション英語I					4	
	コミュニケーション英語II					4	
	コミュニケーション英語III						2
	英語表現I	1					
	英語表現II						2
	英語会話						2
	教養基礎「英語」I	1					
	教養基礎「英語」II			1			
	教養基礎「英語」III						2
	家庭総合	1		2		1	
総合的な学習の時間	持続可能な社会の探究Ⅰ			2			
	持続可能な社会の探究Ⅱ					1	
ホームルーム	1		1		1		
計		35		35		12	7~23

☆ ㊦印は同時に授業を行うことを示す。

3年間を見通した教育課程

本校では、教養教育の長い伝統と各教科・科目・総合的な学習の時間における探究的な学習活動の実績を活かし、全校生徒が3年間にわたり、教養教育をふまえた、探究的な学習によりグローバル人材としての資質・能力を培う教育課程の開発に取り組んだ。また、従来行ってきたお茶の水女子大学教員やNGO等の専門家による特別講義を、「グローバルな諸課題を解決する力を育てる」、「日本や世界の文化や現状、課題を知る機会を提供する」といった観点から整理・拡充し「グローバル講座」を設けた。

こうしたカリキュラムの実施は、本校の教員の力だけでは不可能であり、当初から、お茶の水女子大学を始めとする大学や研究機関、国際NGO、IBMをはじめとする多くの企業、イオン1%クラブをはじめとする公益財団法人等のご助力を得て実施しよう計画したが、実際には予定していた以上に多くの方々からのご支援を受けることができ、非常に充実した教育の実現が可能となった。ご協力くださった皆様に感謝したい。SGHとしての5年間は、既に高校生の学びの場が学校内にとどまらない社会に移行していることを強く実感する日々の連続であった。

グローバル地理

第1学年次のSGH科目は、地理教諭が担当する、地理歴史科の学校設定科目「グローバル地理」(2単位)である。これは、探究的な学習に必要な技能を身につけるとともに、グローバルな社会的諸課題を知り、その中から自分が解決したいと思える課題に出会うことをねらいとする科目である。1学期には、SGH指定以前には学年づくり・学級づくりを目的として実施していた5月の諏訪合宿を活用し「御田町フィールドワーク」を行い、その事前学習・事後学習を通して、探究的な学習に必要な技能を体験的に身につける学習を実施する。

2学期以降は資源・エネルギーや環境、ジェンダー、貧困、人権等のグローバルな諸課題を扱い、冬休み以降、それまでの学習をふまえて、次年度の「持続可能な社会の探究Ⅰ」で探究するテーマを設定させる。この時のテーマ設定の指導には「持続可能な社会の探究Ⅰ」担当教諭も関わっている。

お茶の水女子大学の協力による「図書館を活用した探究方法」「社会調査法」等の探究の技能に関する特別講義や、外部の専門家による「発展途上国の人口問題とジェンダー」「被災地で考える希望の再生」等の特別講義も、適宜実施している。

持続可能な社会の探究Ⅰ

第2学年次のSGH科目は、「総合的な学習の時間」を活用して行う「持続可能な社会の探究Ⅰ」(2単位)である。生徒たちは3領域7講座にわかれ、各自の設定したテーマについて、その解決策を「グローバル地理」により培った技能を用いて探究していく。

5月に実施する生徒主体のフィールドワークやその報告会、9月の文化祭における発信、11月の中間報告会、論文作成等の全講座共通の年間計画にそって、各講座の担当教諭が、所属する生徒の問題関心に応じて特別講義や校外学習をアレンジするとともに、生徒自身が計画した校外学習や成果発表にも取組ませ、主体的かつ深い学びの実現をめざしている。



東京大学医科学研究所へのフィールドワーク

講座の担当者は教科等の専門性を活かせるよう配置し(例えば「生命・医療・衛生」講座は生物担当教諭と保健体育科教諭、「経済発展と環境」は地理担当教諭と物理担当教諭)、お互いの強みを活かして充実した指導を行うとともに、担当者間の学びによる教員の変容を期待できる体制を構築した。

評価については相互評価や自己評価を取り入れたほか、講座担当者のみではなく、領域間で評価規準を共有しブラッシュアップを図った。2017年度からはお茶の水女子大学の半田智久教授の協力により、汎用型デジタルポートフォリオ「super alagin HS」の開発を進めている。

持続可能な社会の探究Ⅱ

第3学年次のSGH科目「持続可能な社会の探究Ⅱ」（1単位）では、「持続可能な社会の探究Ⅰ」における各自の探究学習の成果をクラスで共有した後、クラスごとに英字新聞を作成する活動を中心とする学習を行っている。編集委員を中心に、新聞の名称やテーマ、紙面割り等を話し合いながら英字新聞を作成する協働的な学びを通して、社会課題への理解を深め、英語力を鍛え、他者と協働して課題解決を進めることのできる資質・能力の涵養をめざしている。



英字新聞の作成に向けた話し合いの様子

英字新聞の作成は、読売新聞社（2016年度まではThe Japan Times）および英語教育協議会（ELEC）との提携によりグローバル教育センター（GEIC）が開発したプロジェクトに参加し進めている。本校では、英語科教諭、国語科教諭、数学科教諭、理科教諭がチームを組み「持続可能な社会の探究Ⅱ」の開発にあたり、英語科教諭が中心となり年間計画や評価規準の作成を進めてきたが、2018年度にはリーダーを国語科教諭に交代した。また、年間計画や評価規準の作成、進度の調整、評価等は担当者の協議により進めるが、時間割は3人の教員がそれぞれ1クラスの指導を担当する形で組んでいる。このようにして、外部の資源を活用することにより、日頃の指導を英語科以外の教諭が担当しても、生徒に高度な英語活用力を身につける機会を提供することを可能にしている。

2017年度4月と1月に実施した意識調査では、「そのトピックについて知っていれば、まとまりのある英文が書ける」、「関心のあるトピックであれば、主張を明確に英語で述べられる」のそれぞれに肯定

的に回答した3年生の割合が前者では47.0%から62.2%に、後者では39.8%から51.3%に増えた。こうした大きな変化は他の学年では見られないため、「持続可能な社会の探究Ⅱ」における英語を用いた多角的な活動による成果であると考えている。

海外研修

2年生の希望者約30名を対象として、10月に台湾研修を実施している。他国の同世代との交流や議論を通してグローバルな意識を高めること、英語活用力向上の機会を提供すること、海外における情報収集等により探究的な学びを深めることをねらいとしており、ホームステイや台湾工商会訪問、第一線で活躍する女性の講演等のプログラムに加え、台湾大学の学生や台北第一女子高級中学の生徒と「持続可能な社会の探究Ⅰ」において探究しているテーマについて英語でディスカッションし、考察を深める機会を設け、探究的な学習の一環となるようプログラムを組んでいる。

参加者の選考にあたっては、英語活用力よりも研修に参加する目的が明確であること、探究的な学習の一環として台湾研修を活用する計画が立てられていることをより重視している。帰国後の調査では、例年8割程度の生徒が国際政治、外交、経済への関心が広がったと答えているほか、2017年度には約7割の生徒が「関心のあるテーマについて自主的・積極的に学ぶようになった」と答えており、台湾研修はグローバル人材として必要な資質を培う場として有効に機能していると考えている。

イオン・アジアユースリーダーズ

イオン・アジアユースリーダーズは、2010年からイオン1%クラブが実施してきた、アジアの数力国の高校生・大学生が参加し、異なる社会的・文化的背景を持つ同世代の若者が、英語を共通言語として、一つのテーマについて議論を重ね、問題解決力や自発的な行動力を高めるとともに、グローバル感覚や価値観の多様性を学ぶことを目的とするプログラムである。議論のテーマには「環境」や「食と健康」などグローバルな社会課題が選ばれてきた。

本校は2013年度よりアジアユースリーダーズへの生徒派遣を行ってきた。より多くの生徒に学びの機会を提供するため、台湾研修とアジアユースリー

ダースの両方に参加することは認めていない。

参加が認められた生徒には、SGH予算により外国人講師やお茶の水女子大学への留学生らによる英会話の補習を実施している。また、参加生徒（例年5名）同士で、プログラム参加に向けて必要な事前学習は何かを考え、開催国および参加国に関する基本情報や議論のテーマに関する学習計画を立て、情報収集や集めた情報の検討を行うよう指導している。7月にはイオン1%クラブ主催の日本からの参加校生徒が参加する勉強会に参加し、専門家のレクチャー等を通して学びを深めている。

実際にプログラムに参加した生徒の多くが、アジア各国の高校生達の英語力や積極性に圧倒されたと話している。しかし、その体験を通して、グローバル社会で生きるために必要な資質・能力に気づき、英語や様々な学びへの意欲を高め、より積極的にチャレンジする姿勢を身につけており、アジアユースリーダーズ参加の意義は非常に大きいと感じている。

参加生徒には11月には2年生、12月には1年生を対象とする報告会を行うことを義務づけ、アジアユースリーダーズへの参加を通して得た体験や考えを多くの生徒が共有できるようにしている。

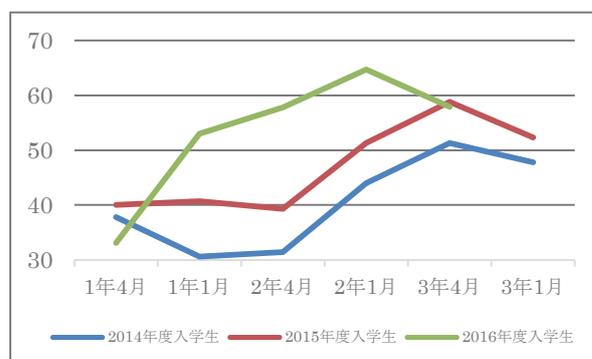
全校体制の構築

SGH事業に応募した時点では、研究部や地歴公民科を中心に、従来のカリキュラムを大きく変えないSGHカリキュラムを構想したが、実際に取組を始めるとそのカリキュラムでは、一部の生徒が探究課題を2つ抱えることになるなど、生徒の負担が大きい上に、探究を深めにくいといった問題があることに気づかされた。そのため、平成28年度に計画変更を申請して認められ、「総合的な学習の時間」の内容を一新して現在のSGHカリキュラムを編成するとともに、全ての教員がその専門性を活かす形で役割を担う全校体制によるSGH推進体制を整えた。

SGH事業については会議の場で報告し、その動きを全員が把握するほか、校内研修会等の活用によ

りそれぞれのグループの成果および課題を共有するとともに、質の向上に向けた意見交換を行い、より充実したカリキュラムをめざし日々改善を重ねている。

今後の展望



論理的思考力を伸ばしたいと答えた生徒の推移（％）

上の図は、年に2回実施している意識調査において、今後伸ばしたい力として「論理的思考力」を選択した生徒の割合が入学から卒業までの間にどのように推移したかを示したグラフである。グラフからは「持続可能な社会の探究Ⅰ」の活動を通して、論理的思考力の必要性を感じるようになる生徒が多いことが確認できる。「探究Ⅰ」に取り組む前に「論理的思考力」の必要性に気づき、それを伸ばすことができれば、より質の高い探究が可能になると考え、「グローバル地理」をはじめとするさまざまな教科目において、統計等のデータを適切に活用し論理的に思考を組み立てる力を育てることを意識した指導を実践した結果、2016年度には1年生のうちに論理的思考力を伸ばしたいと考える生徒が増えた。

2017年12月にはGPS - Academicを振り返るグループワークにより論理的思考力を伸ばす取組を始めた。今後も早い段階から論理的思考を重視する意識を持たせ、質の高い探究的な学習を通して、論理的思考力を培うカリキュラムを維持・発展させていきたい。